



6月10日の空襲で全壊した舟島小学校校舎。前列左から4人目が櫻井富次郎先生。(高等科第3学年卒業記念写真 昭和14年)
(写真提供：倉田親子さん)

霞ヶ浦(その19) 6月10日阿見空襲2

6月10日の空襲による犠牲者は374名に及びましたが、その中には青宿地区住民7名、立ノ越地区住民11名、廻戸5名、竹来9名、島津16名、美浦村舟子6名、予科練面会人13名、通行人2名の計69名の民間人も含まれていました。

ご自宅で空襲に遭われた関文子(せきふみこ)さんと戦災復旧作業に携わられた吉田郷里(よしださと)さんとからお話を伺いました。

空襲の記憶

高4回関明氏夫人・文子さん(旧姓櫻井)は、当時島津地区にあった舟島小学校当時は舟島国民学校、現阿見農協舟島支所の地に所在^(注1)の3年生でした。お父様の櫻井富次郎氏は同校の校長を務められており、習字(書道)と音楽とはお父様の授業を受けられたそうです。当時はのお住まいは舟子地区の清明川の左岸(現美浦村舟子)にあり、お父様は自転車、文子さんは歩いて学校に通われました。

1945(昭和20)年に入ると、阿見地区も空襲を受けるようになり、お父様は警戒警報が発令される度に、学校に安置されている御真影(明治維新以降太平洋戦争敗北までの、天皇・皇后の公式の肖像写真。宮内省から各学校に貸与され、校長の責任で厳重に管理されており、儀式の際に飾られた)と教育勅語とを守るために自転車、車で学校に駆け付けられました。文子さんたちも防空演習を受けるようになり、通学途中などで空襲を受けた時には、窪地などのできるだけ低い所に伏せて身を守るようにと教えられていました。

1945年6月10日(日曜日)も早朝から警戒警報が発令されると、お父様は学校に飛んで行かれ、いつものように家にはお母様と文子さんだけになりました(お兄様は大学生でしたが、志願して弘前の連隊に入営していました)。8時頃から阿見方面の爆撃が始まり、爆撃音が聞こえていました。家にも防空壕が掘ってありましたが、清明川に近いため水が湧いてきてとても使えるものではありませんでした。お母様と近所の家の防空壕に避

難しようかと話していた矢先の9時少し前、突然爆撃を受けました。木原地区にあった海軍の木原送信所^(注2)を狙った爆弾が舟子地区に落下したようです。爆発で辺り一面土埃で真っ暗になり、二人して家の外に出ようとしたのですが、慌てて玄関の上がりかまちで転んでしまいました。玄関の土間に倒れると、上がり口の扉が倒れてきて、ちょうど倒れた二人を覆うような状態になりました。その時、家の前の桑畑に爆弾が落ちました。爆弾の破片が頭の上を飛び交い、猛烈な爆風で家は傾いてしまいました(破片がめり込んだ箆筒はまだ櫻井家に残っています)。爆風が収まり、ようやく外へ出てみると、桑畑には爆弾の穴が三つ空き、電柱は折れ、電線は至る所で切断されていました。前と後ろの家、清明川対岸の家が燃えていましたが、それぞれ敷地が広がったため、櫻井家は類焼を免れました。対岸の家では1学年下の女の子が亡くなりました。防空演習で教えられた通り、両手で耳を押さえて伏せの姿勢で倒れていました。衣服は焼けてなくなり、遺体はピンク色をしていました。その子のお母さんは、長い間我が子を抱きかかえ、泣き崩れていました。

暫くすると、誰かが「舟島小学校も爆撃され、跡形も無くなった。」と知らせてくれました。二人は、お父様も無事ではないだろうと暗然たる思いでしたが、夕方近くになってお父様が戻られました。お父様は、学校に着いて直ぐ、御真影と教育勅語とを運び出し、学校の防空壕に飛び込んだ瞬間に爆撃を受けられました。後日、お父様は「御真影と教育勅語とを守れたのは勿論だが、日曜

日で子どもたちがいなくなっただのが何より良かった。」と語られたそうです。

空襲後、学校が再開され登校した時に爆弾の破片を持って行きました。学校で集めたのです。鉄資源の不足を補うため、爆弾の破片さえも利用しようとしたのだと思います。校舎が全壊したので、近くの養蚕小屋を教室に改造して授業が行われました。低学年と高学年を午前・午後に分けての二部授業になりました。水泳の授業は先生に引率されて舟島格納庫^(注3)に行き、格納庫のドック(船舶まり)で行われました。コンクリートの壁に囲まれてプールのようでした。格納庫も相当の被害を受けていて扉は閉じられ、以前目にしていた水上機を見ることはできませんでした。この格納庫を狙った爆弾が舟島小学校を直撃したわけですが、当時は何も分からず泳いでいました。

※お父様の櫻井富次郎氏(雅号は富園)は戦後まもなく早期退職され、「書窓」書道会を主宰、多くのお弟子さんを育てられました。また茨城大学の講師等も務められ、書道教育に尽力されました。櫻井氏が書道会を始められた1947(昭和22)年のある日、GHQから呼び出しを受けたそうです。GHQは書道も軍国主義の復活に繋がると考えていたようです。櫻井氏は種々説明をして、1948年には会報の第三種郵便物認可を得ることができました。

〔2016年2月23日、高21回松井泰寿がお話を伺いました〕

(注1) 舟島小学校

舟島小学校は明治13年島津小学校として創

立され、以後島津尋常小学校(明19)、舟島尋常小学校(明26)、舟島尋常高等小学校(明36)、舟島国民学校(昭16)と改称され、昭和22年に新制舟島小学校となりました。

(注2) 海軍の木原送信所

1942(昭和17)年頃に建設され、無線通信を行っていた。敷地は約5万㎡、送信施設は正五角形の土地の各頂点に立てられた5本の高い鉄塔とその間に張られた送信空中線とから成り、遠く南方の基地や艦船にまで無線通信をしていました。送信施設のほか兵舎、炊事場、浴場、自家発電所、蓄電池設備、揚給水施設などが置かれていました。現在は跡地の一部に老人福祉センターや運動公園などが造られています。

(注3) 舟島格納庫

1941(昭和16)年頃、海軍が建設した大型水上飛行艇用の格納庫。三連の格納庫が二棟建設されました。格納庫は幅180m、奥行70m、高さ22mの大きなものでしたが、6月10日の空襲で甚大な被害を受けました。現在は防衛庁技術研究所の土浦試験場となっています。

6月10日 阿見空襲

土浦市在住の吉田郷里さんは1945年、関東配電(株)の社員として阿見空襲被害の復旧工事に当たられました。その時の様子をお聞きしました。

1945年6月10日朝7時前に、いつも通り自転車で出勤しましたが、途中から空襲警報が鳴りっぱなしになりました。「今日はおかしい、何かあるぞ。」と感じ、東崎町の営業所に急ぎました。営業所に着いた途端の大きな音と振動にびつくりし、二階の事務室に駆け上がりました。その頃事務方の人たちは神立に疎開しており、事務室は閑散としていました。事務室の窓から阿見方面を眺めるとものすごい煙が上がっており、水面に石を

投げた時にできる波紋のような円形の空気の波(衝撃波)だったのでしよう)が広がってきて、営業所の上に来たら、立っていられないほど建物が大きく揺れたので、思わず身をすくめてしまいました。12時頃、関東配電阿見派出所の渡辺さんが駆け込んで来られ、上司の方に敬礼をして「阿見が爆撃されて、ひどい状態です。」と報告されていました。



空襲下の予科練

破壊(現在)により、破損部分修復された。→
徳表翁蔵の空襲への被害
吉田郷里さんの阿見空襲被害の復旧作業



復旧作業

翌日から阿見の復旧作業が始まりましたが、吉田さんは二三日後に阿見に入りました。青宿の関東配電阿見派出所は全壊は免れましたが、柱が立っているだけで、土壁は爆風で飛ばされて無くなっていました。使用された爆弾は、多目的250kgと言われるもので、鋭い破片、強い爆風、加えて焼夷効果も持っていました。そのため、破片で電柱は見事に切

断され、電線(銅線)の切断箇所は削がれた際の熱で硬くなっていました。直径8mから10mの穴が所構わずできており、道路は寸断されて通行不能、現在の予科練記念館から先の田圃は穴だらけになっていました。予科練のコンクリート壁には無数の傷跡が残り、全壊家屋もあちこちに見られました。派出所裏の農家も押し潰されていました。そこには無数の蠅が群がっていました。先輩から「あそこには死体があるから近づくな。」と言われました。予科練や航空隊の方々の遺体は、兵隊さんたちが戸板に載せて適性部(現在の土浦三高)まで運び、茶毘に付されたようですが、民間人の遺体の収容までは手が回らなかったのか、何ヶ所かで蠅の群れを目撃しました。

その後連日、阿見町に通い、兵隊さんの応援を受けて作業に当たりましたが、警報に怯えて毎日が不安でいっぱいでした。実際に空襲を受けた時には、土浦まで逃げれば大丈夫だろうと自転車で逃げましたが、一緒に逃げた人たちが「今日は土浦が空襲されるのではないか。」と話していたので、土浦も危ないと思い、虫掛まで避難したこともありました。霞ヶ浦航空隊のすぐ側で仕事をしていた時には、グラマンの空襲を目撃しました。飛行機は掩体壕に納められていましたが、野積みになっていたドラム缶が機銃掃射され、曳光弾で火が付いたのか、爆発して空中に飛び上がり、マツチ箱のように見えました。自分が狙われたらと思うと、その恐ろしさに生きた心地がしませんでした。

空襲の被害を少なくするために、土浦でも建物の強制疎開が実施されました。疎開と言っても建物を移築するわけではなく、延焼を防ぐために建物を取り壊すだけのことです。東崎町、祇園町、大和町の道路沿いの民家が対象となりました。吉田さんは電線を外す作業に加わりました。家屋内の配線や器材に実際に触れて、良い勉強になりましたが、目の前で自分の家や店舗を壊される方々の気持ちを思うと気の毒でなりません。

空襲で亡くなった予科練の方々は、吉田さんより2、3歳年上の若者でした。戦争中とはいえ、それぞれ夢や希望に溢れていたはずですが、しかし、その青春が一瞬のうちに奪われてしまいました。復旧工事で目にした光景は、今でも「涙する記憶」として消えることはありません、とのことでした。

「2016年1月19日、高21回松井泰寿、鴻巣茂がお話を伺いました」

(注4) 関東配電(株)
土浦に電灯が初めて灯されたのは1910(明治43)年のことでした。東崎町に土浦電灯会社が創設され、100キロワット火力発電機を設置して、その年の11月に送電を開始しました。しかし当時はガス灯の全盛時代で需要が少なく、利用者は土浦町200戸のうちの300戸に過ぎませんでした。土浦電灯は1915(大正4)年に江戸崎電灯会社を合併しましたが、1917年に帝國電灯会社に買収され、ついで1926(大正15)年東京電灯会社に合併されて土浦出張所となりました。さらに1942(昭和17)年、国家総動員法に基づく配電統制令により東京電灯、甲府電力、富士電力、日立電力が統合され、関東配電が設立されて土浦営業所となりました。戦後1951(昭和26)年5月1日、関東配電は東京電力株式会社に移管され、東京電力が東京電力株式会社に移管され、東京電力が東京電力株式会社に施設を現物出資し営業停止となり、東京電力土浦営業所が業務を引き継ぎました。